第45号　50円
昭和51年11月25日

内　容

国家間の壁をこえて…… 1
延40万人を祝う交歓会…… 2
短大を協力会員校の学部扱いに… 2
千人会報告…… 3
開館十周年記念お祝い募金報告… 3
第1回共同セミナー委員会…… 4
第13回大学教員懇談会…… 4
小さな大学共同社会づくり…… 5
館長日記から…… 7
業務通信…… 6　利用状況…… 7

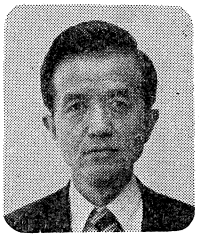
セミナー・ハウス
SEMINAR HOUSE NEWS

発　行
財団法人 大学セミナー・ハウス
≪所在地≫
東京都八王子市下柚木
(〒192-03)
電話　0426-76-8511～3
振替口座　東京　74590番
≪東京事務所≫
東京都中央区日本橋本町3—3
三井銀行本町支店ビル5階
電話　東京　(241) 3961
編集・発行人　飯田宗一郎
製作　中央公論事業出版

国家間の壁をこえて

開館十周年記念事業に寄せる

東京大学教授
坂本義和



この十年位、国際的な人間の移動が急速にふえており、統計によれば、留学生や観光客も十年ごとに倍増する勢いでふえている。私個人の生活をふりかえっても、たしかに過去十年間に、国際会議に出る回数がかなり増したし、二年間国連の研修所で仕事をするといった機会も与えられた。このように、いろいろな国の人と話し合ったり、一緒に働いたりして、感じたことがいくつかある。

第一は、日本の教育は、能率のよい日本人をつくるのには向いているかもしれないが、世界的な視野や感受性をもった人間をつくるには、ひどく不向きにできているということである。

たとえば国立大学、とくに旧帝国大学を継いだ大学は、国家的な指導者、ナショナルなエリートを養成する上では相当に成功したかもしれないが、世界人をつくるのには失敗している。法学部のカリキュラムをとっていえば、日本の法律を駆使できるようにするためのメニューは完備しているが、それ以上のものがあまりない。なるほど「国立大学」とは、「ナショナル・ユニヴァーシティ」と訳すべきものなのだ。だが残念ながら日本では、私立大学もその大半は国立大学をモデルにする傾向が強いから、私大も「ナショナル・ユニヴァーシティ」の変種でしかないことが多い。

もちろん私は、法学部で日本の法律しか教えていないなどといっているのではない。外国の法律や政治とか、国際法や国際政治などの講義もある。しかしここにも問題がある。一つは、一体何のために外国のことを勉強するかというと、それは日本国の有能な働き手となるのに必要だからだとされている点である。これでは基本的な発想は同じだといわざるをえない。もう一つは、一見これとは対照的に、特定の外国という専攻の対象に埋没してしまうことがあるという点である。これは、むしろ先生や大学院生などに顕著なことかもしれないが、たとえば米国なりフランスなりを専攻するとなると、まるで世界には米国しかないような発想になったり、世界はフランスのためにあるかのような考え方に陥ったりし、当の米国人やフランス人の方がはるかに広い視野で自分の国を相対化していたりする。こうした一外国没入の発想は、日本国没入の発想と、一見反対のようで、実は同じことの裏表にすぎない。

日本の教育には、どうもこうした意味での一国中心的発想が強過ぎるように思われる。それに、こうした教育では、日本国の有能な働き手をつくる上にも、もう限界がきているのではないか。つまり、日本国の将来のためにも、日本国なり一外国の枠をこえた、世界的な視野に立った人物を育てていくことが焦眉の課題になっているのではないか。

だが残念ながら、こうした世界人を養成する方向にカリキュラムを変えたりすることは、日本の大学、とくに国立大学では、たいへん時間と手間がかかることで、近い将来に多くを望むことはできない。だとすると、少なくともそうした口火を切る役割は、大学の外の場、たとえばセミナー・ハウスのようなところが果たすべきであろう。

世界人をつくるには、大学の教師と学生を国際化し、東西南北、いろいろな社会からきた人々が、人間としてのふれあいを通じて相互に教育し学習することが必要である。今の日本の大学では、入試という障害一つとっても、こうしたことは期待しがたい。しかし人間の視野や発想を世界化していくためには、こうした人間的学習が不可欠であるということ、それがこの十年の経験で私が感じた第二点である。

これまでに私が参加した国際会議には、大別すると三つの型がある。一つは、政府や国際機構の代表が集まる公式の会議、第二は、いわゆる国際学会である。これに対して第三の型は、特定の課題や問題関心を共通にする十人ないし二十人位の小規模の会合で、通例一週間程度、都市の雑音から離れた質素な宿舎で起居を共にすることになる。この三つの中で、自分の視野や発想を、いささかでも世界化する上で、一番有意義だったと私が感じるのは、第三の型である。というのは、第一の型は、在来型の国家中心的な組織代表の会議であり、第二の国際学会は、専門家としての共通言語を、かなりの大規模な集会で交わすことに止まりがちである。それに対して第三の型の場合には、意見が対立するにしろ一致するにしろ、互いに全人格的に衝撃を与え合う。こうした生活を通して、この世界には、自分がこれまでまったく気づかなかった問題、苦悩、歓びがあり、自分がまったく知らなかった発想、感受性、生き方などがある

（次頁5段目へつづく）

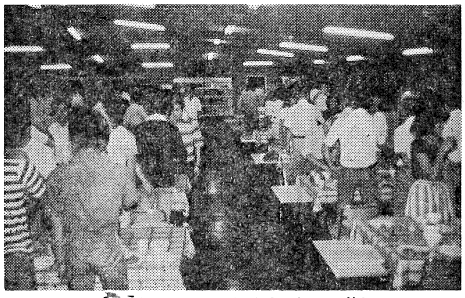
心のふれあい強めて十一年
延四〇万人の記録をつくる

四〇万人を祝う交歓会＝9月16日の夕食会で

事業は歴史をつくりながら発展する。利用者四〇万人というこの記録をつくるまでに十一年二ヵ月を要したわけである。素晴しい国公私立大学の参加の証明である。

人は機会に出会うものである。好運の四〇万人目は津田塾大学大東百合子教授のゼミ学生水口志乃扶さんであった。その日の夕食交歓会を利用して、四〇万人記録達成を祝っていただいたが、このお祝いに参加されたゼミナールは、前記の大東ゼミのほかに、立正大学中村孝之教授、津田塾大学関本年彦助教授、法政大学萩原進助教授、立正大学菊井高昭講師、東洋大学自主ゼミ、東京学芸大学曾我部和宏氏（修士二年）、成城大学武蔵武彦講師の七大学八ゼミ、計一三〇名であった。館長からささやかな記念品が津田塾大の水口さんに贈呈された。ここに人あり、水口さんと当ハウスの交わりは次の一文のとおりである。

なお、10月2日付毎日新聞は「大学セミナー・ハウス創立十一年目で四〇万人を突破」という見出しで学芸欄に報じている。


利用者40万人の記録達成を祝って乾杯

◆ふれあい
——四〇万人目と知らされて

水口志乃扶

八王子市を一望できる小高い丘の上にたつセミナー・ハウスを、これまでに私は五回も利用させていただいた。

一回目は大学生となってまもない頃のフレッシュマン・キャンプで、二回目はハウス主催の共同セミナー、三回目はゼミの合宿でであった。ゼミの時はいつもそれだけで精一杯で、他の大学の学生との交流のいとまもなかったが、セミナー・ハウス主催の共同セミナーでは、前日まで全く知らなかった人たちと語り、討論し、夜のふけるのも忘れた。ともすれば視野の片よりがちな女子大に学ぶ私にとって、観点の異なる意見や、ものの感じ方を知ることができたあの集いが、最も印象に残っている。

このハウスに集った人は数多い。みなそれぞれ魂の深化を求め、真理を語り、限りない未来を夢み、巣立っていったことだろう。

今回のゼミ合宿に参加し、丁度ハウス主催で開催された夕食時の交歓会で、はからずも四〇万人目の利用者となった私は、討論や親睦会での暖かい心のふれあいを求めて、来年もまた、この丘にやってくるにちがいない。そして、私と意を同じくして語り合う友をハウスと共に持ち続けるだろう。

（津田塾大学学芸学部英文科四年）

●同一法人の短期大学を協力会員校の学部扱いに
●先例を開いた二つの短大
東海大学短期大学部
駒沢短期大学

「短期大学は協力会員校に加入できないのでしょうか」という声がある。四年制大学五〇校が既に会員校として加盟している現状において、さらに大学院セミナー館を建て、大学院教育を新たに加える方針をとった現段階において、短大教育を積極的に取上げる余裕はないのである。しかしながら創立以来、広く門戸を開いてきた当セミナー・ハウスは、いくつかの短期大学部もしくは短期大学に利用の便宜を提供してきた。今回は私学の場合、同一の学校法人が維持経営する短期大学部もしくは短期大学に限り、一学部として取扱うこととし、一層の利用に協力措置を講じた。

昭和51年10月をもって東海大学短期大学が、そして7月をもって駒沢短期大学が加入された。なお東海大短期大学部の医療看護学科は4月に新入生オリエンテーションのため大挙して宿泊研修の実を挙げられた。

短期大学を併設されている会員校は積極的に今回の便法を活用されたい。

●日本橋の東京事務所に募金事務室を開く

開館十周年記念事業として国際教育プログラム用の宿舎、セミナー室の新建築を計画していることは既報のとおりであるが、これに要する建築資金二億円を募金するため、従来の東京事務所を再開し、募金事務室とした。7月より山本義雄、海老沢宣子の両氏が専従職員として勤務している。

この募金が成功すれば来秋には国際交流オリエンテーション・センター六八四㎡、内外人指導教授宿舎（ゲスト・ハウス）三一二㎡の建物が竣工する予定である。センターの建築費は一億三千万円、ゲスト・ハウスの建築費は八千万円である。巻頭論文で坂本義和教授はこの建築の功を予言されている。

↙ことを学んだ時の感動を私は忘れることができない。

しかもこうした貴重な経験は、会議時間の討論でもえられるが、それ以上に、食事をしたり、散歩をしたり、深夜まで飲みながらだべったりすることの中でえられることが多い。そんな時、私はふと旧制高校の寮生活を想起することがあった。しかしあの寮生活には、たしかに個性の多様性はあったが、エリート文化の同質性と、外部に対する異常なまでの排他性があった。今日の私たちに必要なのは、もっと広く世界に開かれた、多様な文化や生きざまのルツボである。

私は国際交流ということを単なる仲好しごっことは考えていない。異なった言語、文化、生き方の人間が起居を共にすれば、摩擦や対立がおこることも少なくない。しかし、そうしたぶつかり合いも、人間のふれあいの一つであり、そこから多くのことを学ぶ契機とすることもできる。それもまた、私たちが自分を世界化して行く道程である。

大学セミナー・ハウスが、今度国際交流活動のための新しい計画を立てておられることを飯田さんからうかがった。これまで、大学間の壁をこえるために大きく貢献されてきたセミナー・ハウスが、これからは、国家間の壁をこえるためにも重要な役割を果たされることを心から期待したい。

千人会＝会員増加運動＝第五報＝昭和51年8～9月

◇35名の新会員を迎える

慶大10、早大8、東京女子大3
学芸大2、その他12
計16分布から35名

◇現在会員は一、三二一名です

大学人＝一、〇四四名
社会人＝　二七七名
（51年9月30日現在）

◇新しく会員となられた方々

35名（第34回報告（申込順））

C　法政大学教授　下川浩一殿
C　一橋大学助手　栗原尚子殿
B　東京女子大教授　古崎愛子殿
A　IFFアカデミー　西谷輝隆殿
C　明治学院大教授　高野史郎殿
C　東京女子大学短期大学部教授　小林祐子殿
B　東京学芸大学助教授　久場嬉子殿
C　慶応義塾大学助教授　藤井弥太郎殿
A　慶応義塾大学教授　森岡敬一郎殿
B　横浜市立大学助教授　佐藤宗彌殿
B　慶応義塾大学助教授　稲田　拓殿
B　慶応義塾大学助教授　斎藤文雄殿
C　早稲田大学教授　佐藤慶幸殿
C　早稲田大学教授　長浜洋一殿
C　慶応義塾大学助教授　川合隆男殿
B　慶応義塾大学専任講師　迫村純男殿
B　早稲田大学教授　本明　寛殿
B　早稲田大助教授　鈴木慎一殿
C　早稲田大学教授　伊藤　洋殿
B　早稲田大助教授　松村憲一殿
C　慶応義塾大講師　会田倉吉殿
C　玉川大学教授　土山牧民殿
C　慶応義塾大学助教授　古屋健三殿
B　外務省条約課長　小和田恒殿
C　主婦　大場喜久枝殿
B　東京都立大学助教授　加藤信朗殿
C　東京女子大教授　鳥山英雄殿
C　早稲田大助教授　島田征夫殿
C　市川きもの学院長　市川ヒロ子殿
B　早稲田大助教授　岡沢憲芙殿
A　慶応義塾大教授　深海博明殿
B　慶応義塾大教授　佐藤方哉殿
C　名古屋大助教授　天野郁夫殿
B　東京学芸大学助教授　若林俊輔殿
C　明治大学教授　原　正彦殿

◇会費ありがとうございます

昭和51年8～9月（敬称略）

原誠、伏見康治、源了圓、総山孝雄、高村象平、寺沢徳雄、村上光雄、村瀬興雄、梅沢豊、中村浩三、滋賀秀三、野田一夫、福島要一、坂田道太、菊池雄二、米地実、森川芳彦、三宅彰、金山宣夫、平出彦仁、山井湧、藤井隆、藤沢義男、原島幸太郎、石井不二雄、坂本清、田村恭、黒田孝郎、浅井邦二、尾鍋輝彦、大蔵隆雄、山田勇、時枝満康、大河内繁男、島美喜子、関田寛雄、岩内亮一、花島重春、加藤栄一、渡辺昭夫、山本武彦、市川博、岡本哲治、小沢重男、鈴木修次、藤田淑子、喜田勲、原田行男、中川重雄、吉原功、望月昭一、福山仙樹、穐山貞登、山本芳夫、竹下敬次、岡村文子、寺川国秀、松村信治郎、若槻泰雄、荒井良雄、西村善四郎、下田弘、増田茂樹、近藤晃、藤永光之、押田勇雄、小田切松義、井手久登、永井克孝、片山清一、宮坂宏、小林正一、小林忠義、朽津耕三、築田長世、新井勝紘、尾形典男、藤井幸彦、伊藤良二、岡本剛、田中弥寿雄、稲垣寛、高村多嘉子、松田武彦、松尾登、大沢綱一郎、岡村秀男、森岡敬一郎、岡野澄、森口繁一、坂本義和、泰本融、横山宏、岸英朗、三村卓雄、佐久間徹、千葉正士、高橋彰、岡村甫、村松暎、菊地百合、森川和久、須田精二郎、町野朔、黒田まゆみ、長谷川幸男、伊藤隆吉、村上陽一郎、鞍馬菊枝、関本昌秀、小和田恒、伊藤秀夫、鈴木忠義、後藤米夫、長松昭男、谷俊治、長津一郎、原豊、太田善麿、平野健一郎、小堀桂一郎、田村康男、安嶋彌、鈴木守、朝倉孝吉、山崎真秀、神山妙子、堀江忠男、子安美知子、宮下啓三、飯田経夫、末松安晴、堀川浩甫、伊能敬、柴田愛子、中村正久、辻誠、小田切美文、久場嬉子、東寿太郎、宮川透、井深淑子、相良惟一、片山覚、十代田知三、渡辺愈、栗原尚子、山口貞雄、神山四郎、市川惇信、吉田裕、高野史郎、山岡喜久男、田中未来、藤井弥太郎、島袋嘉昌、長尾龍一、児玉久雄、中島邦男、大友賢二、土山牧民、大塚喜久枝、市川ヒロ子、関口利男、深沢宏、小堀巌、長島正、尾形憲、天野郁夫、海野優

開館十周年記念お祝い募金報告＝第五報

目標額　三〇〇万円
累計　二、七四一、二一六円
（9月30日現在）

▼ご支援に感謝します

8・9月分　一五六、一七〇円

一〇、〇〇〇円　東京工業大学助教授　松山正男殿
三〇、〇〇〇円　大学英語教育学会殿
五、〇〇〇円　東京大教授　藤田宏殿
淑子殿
二、〇〇〇円　日大第二高校教諭　村上光雄殿
五、〇〇〇円　上智大教授　吉田裕殿
三、〇〇〇円　明治学院大学講師　笠井貴征殿
五、〇〇〇円　日本大教授　鈴木喬殿
五、〇〇〇円　東京理科大大沢ゼミ殿
二、七五〇円　千葉大学　アモルファス会殿
三、〇〇〇円　学習院大学教授　児玉久雄殿
三、〇〇〇円　学習院大学児玉ゼミ殿
三、〇〇〇円　東京大学長尾ゼミ殿
二、〇〇〇円　玉川大学教授　若槻泰雄殿
三、〇〇〇円　東京農工大学教授　喜多　勲殿
五、〇〇〇円　慶応義塾大学教授　笹島恒輔殿
二、三三〇円　学習院大学荒井ゼミ殿
二、〇〇〇円　千葉商科大学助教授　高木道信殿
二、〇〇〇円　東京教育大学助教授　田中春美殿
三、〇〇〇円　横浜国大歴史教室殿
一〇、〇〇〇円　立教大教授　小林昇殿
一〇、〇〇〇円　全国農協中央会殿
二、三一〇円　武蔵工業大井上ゼミ殿
三、五〇〇円　立教大学教授　宮川宗弘殿
三、五〇〇円　電気通信大学教授　井早康正殿
三、五〇〇円　東京工業大学教授　関口利男殿
三、五〇〇円　早稲田大学教授　示村悦二郎殿
三、五〇〇円　東京大学教授　森口繁一殿
三、五〇〇円　東京工業大学教授　田原虎次殿
三、〇〇〇円　東京YWCA学院　旦　節子殿
五、〇〇〇円　一橋大学教授　田内幸一殿

共同セミナー委員会新陣容なる

新委員十一氏、旧委員と交替

第1回共同セミナー委員会

昭和51年9月13日／17時～20時半／私学会館

◇新委員長に
岡宏子聖心女子大教授を選ぶ

◇副委員長は宇野成蹊大教授と
関口都立大教授が推さる

本年度第1回の委員会は、前年度で退任された委員に代わる十一名の新委員の顔ぶれが揃ったところで、新旧委員の歓送迎会を兼ねて開催された。

議事はまず飯田館長より前委員長木村尚三郎氏の後任として岡宏子氏を推薦したいとの提案と選考に至った経過の説明があり、全員が賛成してこれを決定。次いで岡委員長より副委員長に宇野重昭、関口晃両委員を委嘱したい旨の発言があり、全員の賛成を得て承認された。

次に議長席に正副委員長がつき、出席者全員の自己紹介が行われたあと、すでに実施された第83・84回共同セミナーの報告と、これから開催される第85・86・87回の実施概要の説明が、それぞれ担当の運営委員と事務局から行われた。

続いて今年度後半に予定されている共同セミナーのうち、第88回については、かねてより計画中の堀米庸三先生の追悼セミナーとして先生と親交のあった先生方を中心に企画し、運営委員に木村尚三郎、石井紫郎両氏が当たることなどが確認された。

最後に第89回の企画をめぐって、各委員から活発な意見が出され、前年度委員会より提案されていたテーマの中から、「人間はどこまで機械か」を選び、岡宏子、野田春彦両氏が中心となって企画を進めていくことになった。これは学際的なテーマとして格好なものであるので、一回で打ち切らずにシリーズとして今後も分野を拡大しながら開催してはどうかという提案も出され、次回委員会でさらに検討することになった。

挨拶に立つ岡宏子新委員長

◇昭和51年度共同セミナー委員

【委員長】
岡　宏子　聖心女子大学教授

【副委員長】
宇野重昭　成蹊大学教授
関口　晃　東京都立大学教授

【委員】
村上陽一郎　東京大学助教授
今井　宏　東京女子大学教授
鵜川　馨　立教大学教授
江沢　洋　学習院大学教授
小沢重男　東京外国語大学教授
野口武徳　成城大学教授
深沢　宏　一橋大学教授
○青木生子　日本女子大学教授
○荒川幾男　東京経済大学教授
○石井紫郎　東京大学教授
○勝見允行　国際基督教大学教授
○坂口順治　東洋大学教授
○瀬在良男　日本大学教授
○谷口汎邦　東京工業大学助教授
○時永　淑　法政大学教授
○野田春彦　東京大学教授
○原　豊　青山学院大学教授
○山岸　健　慶応義塾大学教授
（就任順・五十音順）○印は新任

第13回大学教員懇談会

主題――学歴と職業――「指定校」に関連して

期日――昭和51年9月24、25日

≪発題講演≫
(1)文部省大学局学生課課長　十文字孝夫氏
(2)日経連専務理事　松崎芳伸氏
(3)名古屋大学助教授　天野郁夫氏

≪全体会議発言者・実情報告≫
(1)三井銀行人事部長　森田　武氏
(2)トヨタ自動車工業人事課長　伊藤昭三氏
(3)日本リクルートセンター　企画調査室　水谷正夫氏
(4)東京大学文学部事務長　尾崎盛光氏
(5)法政大学教授　尾形　憲氏
(6)立教大学教授　宮川宗弘氏
(7)東京大学教授　森口繁一氏

≪参加者≫（49名）
東大、東京農工大（各4）、東工大、電通大、工学院大（各3）、成蹊大、専修大、中大、東京理科大、東洋大、武蔵大、武工大、法大、神奈川大（各2）、東外大、東京学芸大、名大、共立女大、ICU、上智大、日大、立大、早大（各1）、文部省、日本経営者団体連盟、三井銀行、トヨタ自動車工業、日本リクルートセンター（各1）

◇　◇

社会の高学歴化に伴い、企業が良質の人材を手間をかけずに求めるための手段としている「指定校制」は、世論の批判を浴びながらも、依然、それにとってかわる代案もないまま進行しているのが現状である。今回は、現在の大学が直面している問題の中から「学歴と職業」を取り上げ、大学教育にどのような形で「指定校制」が影響を及ぼしているかを、大学本来の主体的な目的に照らし合わせて考えていこうとしたものである。

開催期日が就職前戦の動き始める時期であったため、予定されていた企業側の発言者が不参加であったこと、大学側にも同様の事情で参加者が少なかったのは残念であったが、別記の発題講演、企業側・大学側の実情報告が行われ、それらをめぐって活発な討論が行われた。

本来、経済合理的な行動様式を持つ企業と、大学間の格差を基にしたピラミッド型の高等教育システムとが結びついて生み出した「指定校」であれば、ピラミッドを早急に打ち壊すことが不可能である以上、社会的公正の幅を少しでも広げていくという企業側の努力を要請する以外に、当面の解決策はないということ、さらには大学の大衆化にどのように対応していくべきかをめぐる大学の根本問題に深く根を下していることを改めて知らされた懇談会であった。

内容の詳細は紙面の都合で割愛したが、当ハウス企画室から懇談会記録として発行される予定である。

なお発題講演者天野名大助教授は、昭和51年10月25日付の日経新聞に「『指定校制』の落とし穴」と題して書かれ、この懇談会にふれている。

小さな大学共同社会づくり

――学生交歓会は一つの試み――

ここ多摩の丘は、大学セミナー・ハウス讃美が歌うように「あなたもわたしも」起居を共にする一つのコミュニティである。ゼミナールはそれぞれ各群のセミナー室で行われ、学生はそれぞれ各群のユニットに泊まるけれど、七つの群が集まって一つの村落をつくっているのが宿舎村という共同社会である。共同社会には人と人との出会いがあり、ゼミナール相互の交流が望まれる。そのような機会をつくる一つの方法として考案されたのが、食堂で催される交歓会である。昼食のときもあるが、大体は夕食のときを利用して行われる。他大学の教授と学生が知り合うよい機会になっている。

次にかかげる三人の学生の感想は、当ハウスの生活体験記というべきもので、交歓会の成果の一面を物語っている。そして共同社会に入る第一歩は、お互いのあいさつであることを教えている。

私は思う――交歓会について

＜その1＞――――藤丸英明

8月29日より9月1日までお世話になった横浜国立大学歴史教室の者です。

わたくしたちはこれまで毎年春・夏の休暇を利用して三泊四日程度の合宿を繰り返してまいりましたが、この大学セミナー・ハウスが、横浜からそれほど遠くなく、初日・最終日とも時間を有効に使えたこと、ゼミナールに必要な施設が整っていることなどによって、各ゼミとも予定量をこなし、担当教官・学生とも満足した日々を過せたと思います。

施設の利用等に関しては四十余名中約半数の者が以前に利用したことがあるため、とまどうようなことはありませんでしたが、レクリエーションのための広場がもっと広くあればよいと思いました。

31日夜に行われた交歓会も今回の合宿のエピソードとなる楽しい雰囲気の場でありました。

次回の合宿もぜひセミナー・ハウスで行いたいと思います。どうもありがとうございました。

（横浜国立大学教育学部歴史教室三年）

＜その2＞――――庄村理恵子

私は8月末日、国際基督教大学教育学科心理学専攻者による古畑ゼミ九名の一人として、大学セミナー・ハウスを訪れた。私達の目的は、卒業論文研究の中間報告と検討であり、古畑和孝教授のご指導のもとに、熱心な討論が繰り広げられたのである。

滞在日程のほとんどが、参加者各自の発表をもとにした討論に費やされ、緊張の連続であった。そんな中で、お茶の時間と食事とは、私達のささやかなくつろぎと楽しみであった。ところで、当日の夕食時には、思わぬ催しがあった。在泊者の交歓会が開かれ、他のグループとの交流の機会を持ったのである。飛び入り参加で特技が披露され、ピアノ演奏、独唱等とてもすばらしい競演会となった。そして最後に行われた全員による合唱で、皆の心が一つにとけ合った。ただ一つの心残りは、わがICU名物の歌と踊りを皆さんにご披露できなかったことである。今後、別の機会に期待されたい。

私は、大学セミナー・ハウスを初めて利用したが、豊かな自然とキャンパスの設計のユニークさが、まず、私の心をとらえた。各の建物が独立した役割を持ち、全体を構成している。そして、セミナー室はユニットハウスの配置からも、生活へのゆきとどいた配慮を感じとったのである。しかし、交換会等の機会がなければ、利用者間の交流はむずかしいのではないかと思った。

今回は、恵まれた環境と職員の方の暖かいご配慮のもとで、充実した研究活動を行うことができた。ゼミの幹事として、とてもうれしかった。ここでの成果を、今後の研究の発展のために十分に活用させたい。そして、機会を得て、再び大学セミナー・ハウスを利用させていただきたいと思う。

（国際基督教大学教育学科四年）

＜その3＞――――清水英之

「お早うございます」という挨拶が心に広がった時……。

私がこのセミナー・ハウスを使用してもう五年目になってしまった。色々な思い出が心に浮んでくる。あれは野外ステージの落成の日であった。初冬の夜空に星が光って寒そうに僕等の「ロミオとジュリエット」を見つめていた。見ている人々もきっと震えていたに違いない。ところが多くの人達が最後まで見ていてくれて僕等は感謝で胸が一杯だった。そして食堂で見ず知らずの人々とおでんを食べながら語り合い、いつしか一つの大きな雰囲気の中に溶け込んでいったのを覚えている。

私はこの丘の静けさが好きで、大自然を相手に暮らすような雰囲気が気に入っているのであるが、この間とても良い経験をさせてもらった。8月31日の夜、交歓会に出席し他のグループの人々と夕食を共にした。日本人特有の閉鎖性が私を支配していたが、会は和やかに進行し、いつしか一つの大きな雰囲気に囲まれていた。翌朝は快晴だった。昨夜の気分のせいか出会った人に「お早うございます」といってしまった。「あっ！他人だったっけ」。でも、相手の人が笑って答えてくれた時、僕の心に新しい何かが広がったのを感じた。そしてまた一つ素晴しい経験をすることが出来た。

（学習院大学大学院修士一年）

寄贈図書

（昭和51年5～6月）

「学歴信仰社会」　尾形　憲殿
「明日の高等教育」　原　一雄殿
「紀要」7　日本大学精神文化研究所・教育制度研究所殿
「ウガリト文学と古代世界」　高橋正男殿
「母権と父権」　江守五夫殿
「音楽の世界図」
エッソスタンダード石油広報部殿
「民俗の神」　谷川健一殿
「魔性の文化誌」『日本の馮きもの』　吉田禎吾殿
「ミクロ信仰の研究」　宮田　登殿
「町田市史」下巻　町田市役所殿
「早稲田フォーラム」13　早稲田大学殿
「ミュンヘンの小学生」　子安美智子殿
「政治経済史学」一一七～一二一　政治経済史学会殿
「大学論集」4、「大学研究ノート」22・23　広島大学大学教育研究センター殿
「人類への一里塚」　永井道雄殿
「新しいアメリカ留学」中沢次郎殿
「生涯設計計画」　原　芳男殿
「百人百話」　三井銀行殿
「イエスとその時代」　荒井　献殿
「ピリピ人への手紙」　佐竹　明殿
「神田盾夫著作集」第1巻　神田盾夫殿
「TEL ZERO R」I～III　後藤光一郎殿
「わが心の歴史」　堀米美代殿

●業務通信

9月には夏期休暇の最後を合宿にあてた大学のゼミ利用が相次いだ。同月のゼミ実施回数は一一〇で、開館以来の最多記録となった。しかも施設整備期間として三日間の休館があったことを考えれば、いかに多くのグループで連日賑わったかおわかりいただけよう。

そして9月16日には、開館以来の宿泊延人数が四〇万人に到達した。当日は在泊の八グループ、一三〇名が一堂に会する夕食時に記念のお祝い交換会が行われた（詳細は二頁に）。

40万人目の利用者，水口志乃扶さん

◇　◇

順天堂大学の病院業務改善セミナーも、今年で十一回目を迎えるから、これまた当ハウス開館以来の常連セミナーである。今回は理事長、院長はじめ同大学病院の約一五の部署に属する職員約一五〇名が参加され、「患者の応対・インフォメーションの改善」をテーマに熱心な討論を重ねた。医療技術とあわせて病院業務に不可欠のものは心と心のふれあいである、と強調するのは同病院庶務課長で、今回のセミナーの運営に当った笠原貞夫氏だ。「患者に対しては、もとより、病める人々の中で働く職員間の人間関係そしてそれを支えるコミュニケーションが極めて重大である。セミナー・ハウスには人間関係をもり立てるための環境・条件づくりの細かな配慮が満ちており、このような問題を再検討、再認識する場所として最適の環境である」という感想を寄せられた。来年のセミナーの企画がすでに進められている模様である。そして十年つづいたのは裏方の総指揮者、事務部長小林裕一氏の功労であろう。

8～9月の交歓会

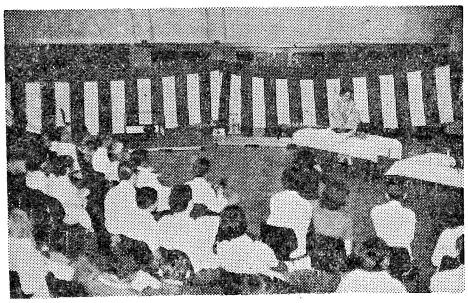
① 8月4日　盆踊り大会
② 8月31日　夕食交歓会（一〇グループ、一二二名）
③ 9月10日　外国人研修生招待パーティ
④ 9月16日　四〇万人到達記念お祝い交歓会

●ユネスコ・アジア地域出版技術研修生を日本の伝統文化でもてなす

昨年についで、本年度もユネスコ・アジア文化センターが主催するアジア地域出版技術研修コースが9月7日から11日まで第九回として当ハウスにおいて開かれた。一行一五名は一ヵ月の研修を始めるに当って、四日間のオリエンテーションをうけた。

10日の夜は日本の伝統文化の紹介をかね、お別れパーティを催した。華道、茶道、和服の着付け、それに琴が加わり、日本を知る上にまたとないもてなしになったらしい。なおこのパーティには同じく東南アジア諸国から来ている国際協力事業団八王子国際研修センターの研修生十数名も招き、合計してアジア一六ヵ国の人々が四〇名に達し、盛会なお別れの夕べとなった。

今回も千人会員矢内宗紫先生が相模女子大生らのお弟子さんをつれて、お花にお茶の実演を、また着付けは市川ヒロ子先生の指導によった。そのご奉仕がつくった「日本の心」のデモンストレーションであった。


生け花のデモンストレーション——矢内宗紫先生

CAMPUS NEWS IN BRIEF

The atmosphere at the Inter-University Seminar House during this last summer was quite "international" with about 200 foreign students and professors participating in various international conferences and seminars held here.

Listed below are the international conferences and courses held during the summer. Some of them have used the Seminar House every year since its opening 11 years ago.

1) Summer Seminar of the Association Internationale des Etudiants en Sciences Economiques et Commerciales (AIESEC). 2) International Student Workshop on Environment and Pollution organized by the Japan International Medical Student Association (JIMSA). 3) Summer Course of the English Language Education Council (ELEC). 4) Summer Course of the Council on Language Teaching Development (COLTD). 5) Annual Meeting of the Fellowship of Reconciliation (FOR). 6) The 10th Summer Course of the Japan Association of College English Teachers (JACET). 7) The 9th Training Course on "Book Production in Asia" organized by the Asian Cultural Center for UNESCO. 8) Special visit of the French scholars participating in the Japan France Geographic Society Conference.

Among the visiting foreign scholars were: Charles J. Fillmore (Prof., Univ. of California); Lily W. Fillmore (Prof. & Dean, Univ. of California); Danny Steinberg (Prof., Hawaii Univ.); Charles V. Taylor (Prof., Univ. of Sydney); Bernard Choseed (Prof., Georgetown Univ.); Fred Lee (Prof., Univ. of Texas).

In the first ten years, more than 8,000 conferences and seminars have been held at the House accommodating over 375,000 persons. At an Inter-University Fellowship Dinner on September 16th, Ms.Shinobu Mizuguchi of Tsuda College was announced as the 400,000th person to stay at the House. A gift was given to her by Mr. Iida, Director of the House, to mark the occasion.

●館長日記から

本号の巻頭論文「国家間の壁をこえて」は、坂本東大教授のご好意を仰いだご高説である。「大学間の壁をこえて」を目標にして十年の歩みをなした大学セミナー・ハウスは、このご高説を天来の声としてうけとめ、次の十年の運命を開拓したい。同教授は10月2日ゼミの学生をつれて一泊された。当ハウスの現状をご自分の眼でしかめられ、帰宅早々お書き下さったのである。同教授は10月27日の朝日新聞夕刊のコラムに「世界人」と題して書いておられる。世界人とは、世界のどこの社会の問題についても、同じように強い感受性と理解力を持つ人なのである◈本号記載のとおり、9月に開館四〇万人の記録をつくった。職員達が汗を流してつくった十一年目の成果である。四〇万人のベッドづくりをして来た宿舎係の荒川孝子は勤続十一年、すっかりサービス・センターの主となった。うれしいことである。◈私はいま、六六歳である。近年の利用率からいけば、次の十一年で百万人に達するであろう。そのとき私は喜寿を迎えることになる。四〇万人を祝う夕べ、学生達からがんばれの拍手を贈っていただいたからには、一日も早く目標にたどりつきたいものである。◈善は急げという。私の喜寿記念の共同セミナーの主題は「精神と物質」に決った。人間はどこまで機械であり得るか。人間は宇宙の運命を変えることはできまいが、平和で心ゆたかな世界をつくることは可能であろう。「義をして成らしめよ、よし天地は失せるとも」と言ったのはカントである。科学技術の恩恵に生きる人間のもう一つの願いは正義が確立されることであろう。◈一橋大学の細谷千博教授が中央公論社の吉野作造賞をうけた。「ジョージ・サンソムと敗戦日本」という論文によるものである。10月19日に受賞を祝うパーティがあり、私は多数の千人会員の教授達にお目にかかった。◈堀米庸三編の「西欧精神の探究」が毎日出版文化賞をうけた。故堀米先生の今生における最後の力作である。発行所の日本放送出版協会は、11月5日、未亡人堀米美代様と執筆者八学者を主客とし、喜びを共にできる人人を招いて受賞祝いのパーティを開いた。親友丸山真男先生が本書を高く評し、友の長逝を惜しみながら讃辞を贈られた。けだし各論に深く、総論において広く、またとない好著であるらしい。お元気になられた美代未亡人とセミナー・ハウスの愛用者にして千人会員の諸教授とご挨拶を交わすことができたのは、幸わせであった。◈祈れ、そして働け—西欧の修道精神が私を七七歳まで導いてくれるであろう。

●利用状況

＊＝同月2回利用
＊＊＝同月3回利用

8月＝四、六五三人
9月＝四、三四五人

◆8月

中央大学教授　川口　弘
上智大学講師　笠　耐
上智大学教授　平井　久
東京理科大学助教授　沢崎　守孝
国際基督教大学　ワグナーゼミ
法政大学教授　石垣今朝吉
東京大学教授　田中　昭二
東京学芸大学婦人問題研究ゼミ
東京都立大学助教授　桐谷　維
慶応義塾大学教授　小林　畔
東京理科大学教授　伊丹　邦夫
東京学芸大学植物系統学ゼミ
東京大学法律学勉強会
東京学芸大学教授　永野　賢
東京学芸大学助教授　佐藤　和彦
横浜国立大学講師　青柳　肇
お茶の水女子大助手　館　かおる
明治学院大学教授　高野　史郎
慶応義塾大学教授　加藤　寛
日本大学教授　鈴木　喬
東京大学助手　山之内萩子
東京大学助手　小林　重章
成蹊大学教授　安原　茂
東京経済大学教授　北田　芳治
武蔵大学教授　横山　定雄
東京理科大学教授　大沢綱一郎
慶応義塾大学教授　山本　登
中央大学教授　高窪　利一
明治大学講師　太田　博
日本大学教授　中島　邦男
東京外国語大学教授　竹内与之助
学習院大学教授　児玉　久雄
東京大学助教授　長尾　龍一
東京大学助教授　見田　宗介
横浜国立大学助教授　有光　友学
学習院大学教授　荒井　良雄
日本大学教授　瀬川　渡
国際基督教大学教授　古畑　和孝
慶応義塾大学教授　十時　厳周
一橋大学講師　浜谷　正晴
大妻女子大学助教授　長野　格
慶応義塾大学教授　関本　昌秀
東京スクール・オブ・ビジネス講師　海老沢達郎
国際商科大学講師　高橋　宏
東京都立立川高校英語部
都立立川短期大教授　吉田　幸弘
千葉大学教授　井上　勝也
東京都立商科短期大学新入生オリエンテーション
杉野女子大学短期大学部教授　田村　皖司
国際医学生連盟（国際学生公害人口問題会議）
協同組合経営研究所
稲城市教育委員会
文学教育研究者集団
生物研究会
関東学院教会
英語教育協議会
日本薬学会
井土ヶ谷キリスト教会
トミー植松語学センター
語学教育振興会
日本友和会
新泉教会
日本聖書協会
日本工業技術連盟＊
東京都高等学校英語教育研究会
東京都八王子市立元八王子小学校教職員夏季研修
非暴力訓練セミナー実行委員会
湘北教育研究会
ドイツ現代史研究者の会
光伸社
大正海上火災保険
日本化薬
〔個人利用〕
東洋大学助教授＊　三浦　安子
成蹊大学学生　遠藤　英子
学習院大学教授　荒井　良雄
上智大学学生　高杉　由美
日本大学教授　栃原　敏房
明治学院大学講師　笠井　貴征
大月短期大学講師　村越　洋子
東京教育大学助教授　田中　春美
千葉商科大学助教授＊　高木　道信
東京大学講師　鈴田　達男
早稲田大学学生　原　好子
千葉商科大学助教授　田中　香澄

◆9月

武蔵大学教授　佐藤　進
明治学院大学教授　久世　了
神奈川大学教授　伊藤　努
慶応義塾大学教授　小野山卓爾
神奈川大学助教授　大友　賢二
東京都立大学教授　三浦　武
東京都立大学助手　田村　俊和
東京大学助教授　見田　宗介
法政大学講師　公文　溥
東京都立大学教授　安平　哲二
東京都立大学教授　城座　和夫
一橋大学助手　栗原　尚子

東京家政大学助教授＊橋口　英俊
東京大学助教授　木村尚三郎
東京都立大学助教授　山住　正己
東京都立大学助教授　河村　望
東京大学助手　後藤　光蔵
国際基督教大学教育哲学研究会
慶応義塾大学教授　石川　明
慶応義塾大学教授　小島　三郎
横浜国立大学助教授＊佐々木弘明
日本大学教授　名東　孝二
津田塾大学助教授　南塚　信吾
東京都立大学助教授　倉沢　進
東京大学教授　安藤　良雄
成蹊大学教授　村瀬　興雄
法政大学教授　野田　正穂
中央大学教授　吉村　二郎
東京大学人文科学研究科読書会
法政大学教授　安井　郁
立教大学教授　高橋　秀
東洋大学教授　藤木三千人
中央大学教授　呉　天降
東京工業大学科学技術ゼミ
聖心女子大学助教授　鈴木　秀子
明治学院大学教授＊　舘　逸雄
東洋大学講師　藤田　藤雄
早稲田大学語研タガログ語講座
早稲田大学講師　深沢　実
早稲田大学助教授　永安　幸正
明治学院大学尾崎ゼミ
上智大学古代哲学研究会
早稲田大学教授　北野　弘久
東京経済大学教授　西川　義朗
法政大学教授　湯川　和夫
成城大学講師＊　武蔵　武彦
東京学芸大学達成動機ゼミ
津田塾大学一年生ゼミ
津田塾大学教授　大東百合子
法政大学助教授　萩原　進
早稲田大学教授　牧野　力
明治学院大学講師　松島　浄
武蔵工業大学教授　井上　忠夫
立教大学教授　牛窪　浩
第11回順天堂大学病院業務改善セミナー
日本大学講師　遠藤　邦彦
東京都立大学講師　栗原　彬
東京外国語大学教授　竹内与之助
法政大学教授　尾形　憲
早稲田大学教授　松田　正一
立教大学教授　三宅　義夫
東海大学東京短期大学部総合ゼミナール＊
一橋大学教授　深沢　宏
東京都立大学教授　石村　善助
明治学院大学教授　増田　茂樹
上智大学教授　吉田　裕
明治学院大学教授　竹内　真一
東京女子大学創作研究会
法政大学助手　水野　節夫
立教大学教授　茂木　虎雄
駒沢大学教授　斎藤　寿
東京女子大学大学祭準備
東京都立大学教授　唄　孝一
東京女子大学教授　福田　一郎
明治学院大学教授　大宮　俠一
明治大学教授　原　正彦
上智大学助教授　河崎　瓊
明治大学教授　篠崎　武
上智大学教授　川田　侃
産業能率短期大講師　佐野雄一郎
山梨英和短期大教授　小菅　東洋
東京女子大学短期大学部教授　川村　輝典
昭和女子大学聖書の学び
立正大学教授　中村　孝之
立正大学講師　菊井　高昭
相模女子大学表千家茶道部　矢内　宗紫
都留文科大学助教授　松本　四郎
産業能率短期大教授　深井　秀夫
六大学連合聖書研究
第13回大学教員懇談会
中央協同組合学園
日本工業技術連盟
(財)ユネスコ・アジア文化センター（第9回アジア地域出版技術研修コース）
日本キリスト教会東京中会
国際ナビゲーター聖書研究
SPORE研究会
講演会「21世紀を語る」
松下電器産業
三浦薬品
日本化学
〔個人利用〕
日本工業技術連盟　有島　佳子
高崎経済大学助教授　三浦　永光
玉川学園女子短期大学学生　三森　久美
安田コンピューターサービス　鳥居　照男
明治大学助教授　松瀬　貢規
東京都立大学助教授　伊藤　直明

■編集後記

9月は宿泊延人数40万人達成というビッグニュースがありましたが、業務通信には割愛せざるを得なかった小さな記事が沢山あり、それらを詳しくご紹介することができなかったのは大変残念です。

本号から利用状況、活動状況を英文で要約したCAMPUS NEWS IN BRIEF を掲載することになりました。国際交流オリエンテーションセンター建築のための募金活動がいよいよ本格的に開始されたことに合せて、紙面を少しずつ工夫していきたいと思います。（能）

高度な学習性と広汎な実用性を兼備！

旺文社 英和中辞典

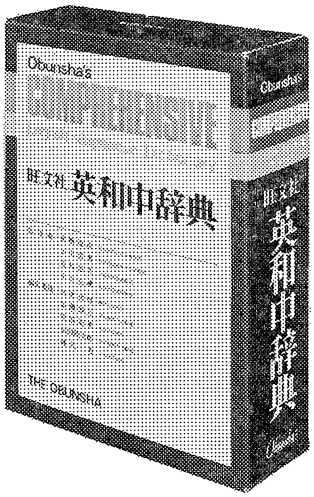
語数10万、用例充実

英語教育出版に永い経験と実績を誇る旺文社が、日本の英語学界の英知を集めて編集した、英和中辞典の決定版です。

◇監修
高橋源次
五島忠久
小川芳男
平井正穂

◇編集委員
鳥居次好
宮部菊男
桃沢力
広瀬泰三
福田陸太郎

B6ワイド版 2112頁 定価2,000円
●豪華特装の机上版・定価 4,000円



★カタログ請求は
旺文社宣伝課「英中」係へ

旺文社 〒162 東京都新宿区横寺町